

れんげ農苑の取り組み

農苑長 平野喜幸

NPO 法人「れんげ国際ボランティア会」は 1980 年、内戦により大量に発生したインドシナ難民（特にカンボジア）のかたがたに対して、「民族や国境を越えて“苦しみの一部を分かちあおう”」という募金活動から始まった国際協力NGOです。その後活動はタイ、カンボジアをはじめスリランカ、インドへと広がり、貧困や差別といった厳しい状況に置かれている人々に対する教育を中心とした支援活動へと継続してきました。その活動は困窮する人々の自立・自助を目的としています。

さて、『れんげ農苑』はその「れんげ国際ボランティア会」の国内活動であり、青少年育成のために運営される循環型自然農場です。日本の食糧自給率の低下、若い世代が地域から去り農業の後継者不足による農村の疲弊等、生活の根幹である命を頂いて生きるという最も基本的なことが忘れ去られた社会が加速して久しくなります。当会では、農を通じ地域からの食の安全性、生命の重要性を若い世代に訴えると同時に、先人が守り育ててきた堆肥づくりや炭焼き、味噌作り等の農村文化を継承し、農を教育の場とすることで、次の社会を担う全人格的なリーダーの育成を目的としています。

2004 年ミャンマーでの 6 年間の農村開発の仕事を終えて帰国した私は、縁あって「れんげ国際ボランティア会」に招かれ、その年の 8 月から循環型研修農場「れんげ農苑」の開墾を始めました。熊本県玉名市小岱山麓の山林約 1.1ha の竹藪を切り開き、パワーショベルで竹の根を掘り上げ、斜面に石垣を組みながら 10 枚の段々畑を造成しました。その後毎年冬の農閑期には、堆肥舎、炭焼窯、研修棟、倉庫など、研修に必要な設備を整備し、地元農家から約 2.5 反の田んぼを借りて稲作研修も行っております。

「れんげ農苑」で行っている農業を分かり易く一言で表現すれば、「50 年前の農業」です。近代的な機械は小さなハンドトラクターが一台あるだけです。稲作は昔ながらの苗代作りに始まり、手植えによる田植え、手刈りでの収穫作業を行い、足踏み脱穀機による脱穀の後、天日干し、唐箕（とうみ）によるモミの選別を行っております。各種野菜も稲作同様に無農薬で、化学肥料を使わず、殆どが手作業で行われます。

農苑では農業を単に職業や仕事としてではなく、先人から受け継いだ文化「農」として捉えています。足踏み脱穀機や唐箕は今では博物館や民俗資料館などでしか見られなくなりましたが、それらを現役で活躍させてこそ日本の農村文化をかつての日本人が持っていた精神性と共に若い世代に伝えられると考えています。経済最優先の開発が深刻な環境問題を引き起こしたことを考えれば、私たちが大自然に生かされているという自然界への畏敬・感謝の念などを研修で作物を育てる中から学んで貰いたいと思っています。

人材育成農場としてスタートした「れんげ農苑」ですが、米や麦をはじめ、年間には 30 種類以上の野菜を土着菌堆肥やぼかし肥、木酢液などを使用しながら、無農薬・無化学肥

料で栽培し、毎年5月から12月までの8ヶ月間は約30戸の野菜会員の皆様にセット野菜として発送するとともに、地元の自然食レストラン等にも販売しております。研修生は、毎日の野菜管理や農作業研修の他、雨が続く時には国際協力や開発、生き方などについての講義なども受けています。

そのような中、これまで長期短期を含め国内外から19名の研修生を受け入れ、そのうち4名が青年海外協力隊に参加し今も南米パラグアイとブータンで活躍中です。また、今年度の研修生も昨年秋募集に合格し、訓練終了後インドネシアに派遣される予定です。海外からの研修生としては、一昨年当農園で循環型農業を学んだイギリスの青年が現在ニュージーランドで土着菌の堆肥づくりを教えています。また、昨年はタイ国から熊本県海外技術研修員として、山岳民族の青年を受け入れました。卒業生の活躍を少し紹介しましょう。

第一期卒業生の小谷君は、現在パラグアイのサンホアキンという町に、青年海外協力隊として着任し、農村開発にたずさわっています。彼は町にあるフェ・イ・アレグリア校という幼稚園から高校までの一貫校で農業の授業を担当しています。そこで彼は子ども達に実用的な農業を教えています。

人口1500人のサンホアキンはこれといって産業もない貧しい田舎町です。住民の多くが自給自足で野菜を作っており、小さい子ども達も農業の手伝いをして生活を支えています。中には両親が出稼ぎに出ているため、子ども達だけの生活を強いられている家庭もあります。サンホアキンは町全体が赤土のため、作物のできはあまりよくありません。小谷君はそんなやせた土地に、れんげ農苑でつちかった循環型農法を駆使して、収穫量を増やす試みに挑戦しています。

小谷君の活動は学校の授業だけにとどまりません。実際に子ども達の家々を一軒一軒巡回し、うまく作物を育てられているかを視察し、アドバイスをしてまわります。そんな彼の活動は着実に成果を上げており、家々の収穫高は確実に上がってきています。また、学校の実習農場での収穫も増え、その野菜を生徒と一緒に町に販売に行き、収入を得ています。さらにその収入で種を買い、畑の面積を拡げて、収穫高と収入の増加を目指しています。

循環型農法の利点は高価な機械を使ったり、大規模な灌漑設備を作ったの農法ではないという点です。落ち葉や動物の糞を使い、土着菌を活用した堆肥作りをして土地を肥やしていくため、農薬や肥料を高いお金を出して買う必要もありません。従って貧困なサンホアキンでも容易に受け入れられ、非力な子ども達でも自分の家庭で実践することができるのです。この地道な活動により、小谷君は今では多くの子ども達から慕われています。さらには子ども達ばかりでなく、地域の人々からも認められ、町を歩くと「ヒロ、ヒロ（本名ヒロミツ）」と声を掛けられるほど大きな信頼を得ています。ハイテクの国から来て、ローテクを教える小谷君は、日本とパラグアイの大きな架け橋になってくれることでしょう。

れんげ農苑では、今後はさらに多くの研修生を受け入れられるように、4名の研修生が寝

泊まりできる宿泊施設を増設しています。将来的には不登校の学生や引きこもりの青年達の受入もできればと考えています。